

Katherine Mansfield の短篇小説 (Ⅲ)

—“A Cup of Tea” について—

久 田 竹 一

夭折した女流作家というものは、彼女たちの名前を思いうかべるとき、その周辺になにか清純な雰囲気といったものをただよわせているように感じられるが、とくに Katherine Mansfield (1888—1923) の場合には、彼女の夫で高名な批評家 John Middleton Murry (1889—1957) が、彼女の死後、彼女は「清澄な魂」の所有者であり、「純粹な芸術家」であったという、“the legend of Katherine Mansfield”⁽¹⁾ を倦むことなく語り続けてきたので、いまではこの作家は、「清澄」・「純粹」ということばと分ちがたく結びつけられてしまったようである。そして、彼女の九十篇近い短篇小説のなかで傑作といわれるものは、そこにおいて彼女の清澄・純粹な魂がもっとも自然な流露を示している、生れ故郷の New Zealand を舞台とした作品群（たとえば、“Prelude,” “At the Bay,” “The Doll’s House,” “The Garden-Party,” “Her First Ball” など）に多く含まれているといわれている。私もこのような見解が正しいと考える一人ではあるけれども、Katherine Mansfield の文学世界には、当然のことながら、清澄・純粹というようなことばだけでは限定しきれないものがあるということもまた認めなければならないと思う。たとえば、*In a German Pension* 中のいくつかの短篇、“Marriage à la Mode” や “A Dill Pickle,” あるいは “A Cup of Tea” などを味読した者なら、この作家がなかなか鋭い（意地の悪い）satire の才能を持っていることに気づくであろう。ここでは、彼女の佳作の一つ、“A Cup of Tea” をとりあげて、紙数の許す限り、私なりに解釈し、鑑賞してみようと思う。

Rosemary Fell was not exactly beautiful. No, you couldn't

have called her beautiful, Pretty? Well, if you took her to pieces.... But why be so cruel as to take anyone to pieces? She was young, brilliant, extremely modern, exquisitely well dressed, amazingly well read in the newest of the new books, and her parties were the most delicious mixture of the really important people and... artists — quaint creatures, discoveries of hers, some of them too terrifying for words, but others quite presentable and amusing.⁽²⁾

これが“A Cup of Tea”の最初の部分であり、私はここを読みかえす度にいつも、なんという見事な書き出しだろうと感心してしまう。作者は、まずはじめに女主人公 Rosemary の一番の弱点を微妙な表現で述べた後で、彼女のいくつかの特徴を手ぎわよく紹介していくが、誇張された表現がうるさいほど連続的に用いられているので、作者がヒロインに対して意地の悪い態度を取っていることが、⁽³⁾読者にはすぐわかるのである。

作者の Rosemary に対する辛辣な態度はこの短篇を通じて一貫しているものであり、それは“pretty”という key word の使用にもよくあらわれているように思われる。この引用のはじめの方に出てくる“Pretty?”という問いかけは、この作品の最後の行の Rosemary の切実な質問 (“am I pretty?”) のなかに使用されて、若さと才気と富にめぐまれながら美人ではない故にコンプレックスを抱いている彼女のイメージを完璧なものにすると共に、この短篇をあざやかにしめくくっているのであるが、そのほかの場合でも、意地の悪い作者は“pretty”という語を Rosemary を形容するのには一度も使わずに、彼女が街で拾いあげた若い女性 (Miss Smith) を形容するためにのみ用いている。すなわち、雨に濡れて寒がっている Miss Smith に帽子を脱がせてくつろがせようとするさいに、Rosemary は、“Your pretty hair is all wet”.⁽⁴⁾ といい、彼女の夫の Philip は Miss Smith を一目見た後で妻に向かって、残酷にも、“she’s so astonishingly pretty.”⁽⁵⁾ というのである。

Rosemary が “Bliss”. (なんという皮肉な題名であろう!) のヒロイン Bertha Young と似ていることは、何人もの批評家によって指摘されてきている。二人とも、召使にかしづかれ、芸術家の友だちに取りまかれて、かわいい赤ん坊と一緒に豊かな結婚生活を送っている。しかし、彼女たちの一見満ち足りたような生活が必ずしも幸福なものではないことを、作者はそれぞれの作品のはじめの部分においてそれとなく示しているのである。大事な夫の心をすでに失っているという事実を知らない Berthaは、“Bliss”の冒頭で、すべてを所有しているという幸福感に陶醉しているけれども、乳母の Nanny にさまたげられて、彼女は赤ん坊さえ思うようにかわいがることができないのである。結婚してまだ二年にしかならない Rosemary には、Michaelという「かわいい男の子」(“a duck of a boy”)があることがはじめに述べられているが、この赤ん坊は彼女によって一度も意識されず、この作品中で以後言及されることもないほど影のうすい存在なのである。では、Rosemary と Philip の関係はどうか。作者はまたしても皮肉たっぷりに、“And her husband absolutely adored her”⁽⁶⁾と誇張したいい方をしているのである。“Love”のかわりに“adore”という動詞を使っているあたり心憎いばかりである。

さて、このような境遇にある Rosemary は、ある日ロンドンの Curson Street の骨董屋ですばらしい細密画のついている小箱を見せられる。(表面に凝った細工のしてある小箱は、Rosemary 自身と一脈通ずるところがあるように私には感じられる。) 値段は二十八ギニーだという。彼女はそれが気に入るが、さすがに高すぎるため、「取っておいて」といって店を出る。

She was outside on the step, gazing at the winter afternoon. Rain was falling, and, with the rain it seemed the dark came too, spinning down like ashes. There was a cold bitter taste in the air, and the new-lighted lamps looked sad. Sad were the lights in the houses opposite. Dimly they burned as if regretting something. And people hurried by, hidden under their hateful

umbrellas. Rosemary felt a strange pang. She pressed her muff against her breast; she wished she had the little box, too, to cling to.⁽⁷⁾

Mansfield の作品においてはしばしば外界の描写に登場人物の感情が反映されて、それぞれの場面にふさわしい雰囲気をかもし出すのに成功しているが、ここに引用したパラグラフなどその典型的なものであろう。冬のおそい午後、「暗闇が雨と共に、灰のように舞いおりつつやってきた」いま、Rosemary は「大気のなかに冷たく苦い味」を感じる。彼女には、「ともされたばかりの灯が悲しげにまたたいている」ように見える。彼女は空虚感にさいなまれる。「すがりつくために、あの小箱も手元にあればよいのに」と思う。このように物語を進めることによって、作者は、Rosemary が花屋で花をいっぱい買うのも、お気に入りの骨董屋で高価な古美術品をあさるのも、充実した生活を送っていないが故に生ずる心の「奇妙な痛み」をまぎらわせるためのものだ、といっているように受け取れる。

飢えと寒さに悩む若い女性から「お茶一杯分のお金」(“the price of a cup of tea”) を求められた Rosemary は、お茶をご馳走するために彼女を自宅へ連れ帰ることを思いついて、“It would be thrilling.”⁽⁸⁾ と考えるのであるが、この場合も作者は、空虚な生活にあきたらない Rosemary はただ単にスリルを求めているだけであって、彼女のふるまいは真の親切心から出ているのではないという風に、読者が読み取ることを要求しているのである。

物語が進展するにつれ、Mansfield の辛辣な筆使いはますます鋭さをまし、Rosemary の欠点が次々にあばかれていく。作者はすでに骨董屋の場面で、

And, turning the creamy box, opening and shutting it, she couldn't help noticing how charming her hands were against the blue velvet.⁽⁹⁾

と書いているが、Miss Smith をお茶に誘った直後の Rosemary について、“I mean it,” she said smiling. And she felt how simple and

kind her smile was.⁽¹⁰⁾

と述べて、彼女のナルシズムを強調しており、とっぴな申し出におどろいてためらう Miss Smith を強引に連れ去ろうとするときの Rosemary の自己中心的な気持を、“I want you to. To please me. Come along.”⁽¹¹⁾とことばによって示しているのである。

Miss Smith と共に自分の車に乗りこんだとき、Rosemary は「勝利感」(“a feeling of triumph”) を味わい、相手を「自分がかからめとったかわいらしい捕虜」(“the little captive she had netted”) のように眺める。作者はこのようにことばを用いて、Rosemary の自己満足と思いがりをあきらかにしているのであるが、さらに彼女の interior monologue として、

But of course she meant it kindly. Oh, more than kindly, She was going to prove to this girl that—wonderful things did happen in life, that—fairy godmothers were real, that—rich people had hearts, and that women *were* sisters.⁽¹²⁾

と書くことによって、Rosemary の自己欺瞞的ないい気な態度をあばいている。

She was like the rich little girl in her nursery with all the cupboards to open, all the boxes to unpack.⁽¹³⁾

上の引用文は、豊かな雰囲気満ちている自宅へ Miss Smith をともなってきた Rosemary の姿を、皮肉な比喩で巧みに描いていると思う。彼女は、結婚して子供もありながら、ちゃんとした大人に成長していないのだから、まさしく、自分の持物(おもちゃ)の多さを自慢している「金持ちの家の女の子」に似ているのである。だから、Miss Smith が濡れた帽子とコートを脱いだとき、Rosemary は平気でそれらを床にじかにおき、相手が空腹のために倒れそうになっているのにも気づかず、たばこをすおうとする。彼女ははからずも自分でいっているように、まったく「思いやりのない、無思慮な」(“thought-

less”) 女性なのである。

Rosemary の “thoughtless” な面は、彼女が女中にお茶をいいつけるさいにも、よく出るように描かれている。彼女は「お茶をすぐに！ それにブランディも！」といい、Miss Smith はブランディなどほしくないので、「奥さま、私のほしいのは一杯のお茶なのです」(“It’s a cup of tea I want, madam.”) といってわっと泣き出すが、それは Rosemary にとって、「恐ろしいような、うっとりするような瞬間」(“a terrible and fascinating moment”) なのであり、彼女はお茶のかわりに、美しいが涙をふくにはあまり役立ちそうもない「レースのハンカチ」(“her lace handkerchief”) を渡してやりながら、その場の光景と自分の親切そうな(しかし、真の親切からはほど遠い、残酷な)行為に、「じっさい、いいようもないくらい感動してしまう」(“She really was touched beyond words”) のである。

しかし、Miss Smith がやっと運ばれてきたお茶と軽い食事をとり終ると、両者の立場は異なってくる。“The Garden-Party” における転換点は、その作品のほぼ真中に位置する、“Something had happened.” という一文であるが、“A Cup of Tea” のそれは、全篇のおよそ三分の二を終ったところに出てくる、“And really the effect of that slight meal was marvelous.”⁽¹⁴⁾ であろう。Rosemary の夫の Philip が何も知らずに部屋へ入ってくるのは、空腹を満たして冷えた体もあたたかくなった Miss Smith が、「生れ変わったような人間」(“a new being”) になり、「一種甘美な気だるさ」(“a kind of sweet languor”) に身を委ねて、炉の炎を眺めているときなのである。

彼の書齋で夫婦だけで向きあうと、Rosemary は夫に Miss Smith との出会いを説明するが、前に引用した Philip の Miss Smith の美しさを賞めることばを聞いて顔が赤らむほどもおどろき、「私——そんなことは考えてもみませんでしたわ」(“I—I hadn’t thought about it.”) という。しかし、正直だが鈍感なところのある Philip は、⁽¹⁵⁾ 妻の心の動揺に気づくことなく、さら

に Miss Smith の美しさを強調した後で次のようにいう。

“Sorry, darling, if I’m crude and all that. But let me know if Miss Smith is going to dine with us in time for me to look up *The Milliner’s Gazette*.”⁽¹⁶⁾

Miss Smith に魅力を感じてしまった彼は、彼女が自分たち夫婦と晩さんを共にするならば、彼女に気づまりな思いをさせないために、婦人装身具新聞に目を通して若い女性向きの話題をしこんでおくつもりなのだろう。そういう彼のだらしなさを、作者は Rosemary の「ばかげたことをおっしゃるかたね！」(“absurd creature!”) ということばで批判しているのである。

夫が愛し関心を持つ女性は自分だけだと信じこんでいたのに、いまその夫から自分が街で拾いあげた貧しい娘の容貌を徹底的に賞賛され、Rosemary は嫉妬で胸苦しくなりながら夫のことばを一つ一つ反すうする。

Pretty! Absolutely lovely! Bowled over!... Pretty! Lovely!⁽¹⁷⁾

もはや彼女には、Miss Smith に対して自分勝手な面白半分の同情心を持っている余裕はない。彼女は Rosemary の好敵手にもなりかねない。Rosemary は自分のものを書く部屋へいき、一ポンド紙幣を五枚出してから二枚元へ返し、三枚だけ持って(このあたりもなかなか辛辣な描写である)、Miss Smith の待つ寝室へ向うのである。

三十分たって書齋にふたたびあらわれた Rosemary と Philip の間のやりとりは次のようである。

“Miss Smith won’t dine with us to-night.” Philip put down the paper. “Oh, what’s happened? Previous engagement?”

Rosemary came over and sat down on his knee. “She insisted on going,” said she, “so I gave the poor little thing a present of money. I couldn’t keep her against her will, could I?” She added softly.⁽¹⁸⁾

なぜ Miss Smith はこの夫婦と一緒に晩さんをとろうとしないのだろうか。

Philip のことばには、期待していた Miss Smith との会食がだめになって残念がっている彼の気持がこめられているように感じられるけれども、貧しい彼女に晩さんの先約がある筈はなかるう。彼女は、Rosemary がいうように、本当に「帰ることをいい張った」のだろうか。もしそうなら、なぜなのだろうか。Rosemary は、「彼女を無理に引きとめることはできないでしょう？」といているが、作者は一ポンド紙幣を三枚つかんで寝室へ入っていく Rosemary の姿を描いて、彼女には Miss Smith を晩さんに誘う気持がないことを、読者に示しているのである。いや、それだけではない。

Rosemary had just done her hair, darkened her eyes a little,
and put on her pearls.⁽¹⁹⁾

と書く作者は、Rosemary は Miss Smith に三ポンド手渡して、家からすぐに出ていくようにいった後で、夫の心を自分の方へ向けさせるためのお化粧品に三十分間のほとんどを費したのだ、と暗示しているように思われる。ところで、Rosemary は「かわいそうなひとにお金の贈物をして」追っ払ったつもりなのだろうが、Miss Smith の方でも一刻も早く立ち去りたい気持を抱いていたようである。なぜなら、彼女はもはや、自分勝手な、思いあがった、同情心のない Rosemary の親切の押し売りに、我慢できなくなっていたのだから。なぜなら、Miss Smith が求めているものは「一杯のお茶」、ささやかな心のこもった贈物なのに、Rosemary はそういうものを与えてくれる人間ではないと彼女にはよく解ったのだから。

この作品の終りの方では、作者は Rosemary だけではなく Philip に対しても皮肉な筆使いをしている。彼は三十分ばかり前に Miss Smith の美しさに「圧倒された」(“I was bowled over.”) といっておきながら、装いをこらした Rosemary が彼のひざに乗って彼の頬にさわりつつ、「あなた、私が好き？」(“Do you like me?”) ときくと、「彼女のあまい、ハスキーな声」(“her tone, sweet, husky”) に悩まされ、「とても好きだ」(“I like you awfully.”) といい、「無駄遣いやさん」(“little wasteful one”) の

彼女に二十八ギニーもする例の小箱の購入を許すのである。

この短篇の結びとなっている Rosemary の問いかけ (“am I *pretty*?”) についてはすでに触れたが、作者は彼女にこういう質問をさせることにより、Rosemary (と、他の多くの女性) にとって、“pretty” であることが最大の関心事なのだ、といっているようである。

[註]

- (1) Frank O'Connor: *The Lonely Voice; A Study of the Short Story*, London, Macmillan, 1962, p.129
- (2) Katherine Mansfield: *Collected Stories*, London, Constable, 1945, p.408
(なお、“A Cup of Tea”はこの一冊全集本の p.408 から p.416 に収められている。)
- (3) Saralyn Dalyは、*Katherine Mansfield* (New York, Twayne Publishers, 1965, p.79) において“A Cup of Tea”に触れ、“The voice of the opening paragraph is malicious.”と書いている。
- (4) Katherine Mansfield: *Collected Stories*, p.413
- (5) *ibid.* p.415
- (6) *ibid.* p.408
- (7) *ibid.* p.410
- (8) *ibid.* p.411
- (9) *ibid.* p.409
- (10) *ibid.* p.411
- (11) *ibid.* p.411
- (12) *ibid.* pp.411—2
- (13) *ibid.* p.412
- (14) *ibid.* p.414
- (15) 久代佐智子氏は、A Note on Katherine Mansfield—Her Search for the Real Self—(京都女子大学・英文学論叢、第7号、p.7) において、“She

[Rosemary] little imagines her husband is charmed by a dirty beggar girl at all. Her husband is honest enough to tell her so, and the seed of tragedy is thrown away dead. The case with Bertha Young is tragic.” と書いている。

- (16) Katherine Mansfield : *Collected Stories*, p.415
- (17) *ibid.* p.416
- (18) *ibid.* p.416
- (19) *ibid.* p.416

[文 献 紹 介]

最近わが国で発表された Katherine Mansfield 関係の論文には、次のものがある。

- Katherine Mansfield の作品に見られる ‘Dots (...)’ の用法について 三上源四郎 (中央大学・英語英米文学, 第八集)
- 「園遊会」 そのほか——K. Mansfield の二三の作品について—— 西台美智雄 (帝塚山学院大学・研究論集, 第3輯)
- キャサリン・マンズフィールドのひとりぼっちの女を描いた三篇について 加藤富貴子 (神戸女子短期大学学会・論叢, 第14巻第1冊)